

# ある女性患者の憑依妄想にみられる精神力動についての事例的考察

吉 川 茂

## I 目 的

Jaspers, K.によれば、自我意識の形式的な標識としてつぎの4つ、すなわち「その能動性、単一性、同一性、それに外界や他人に対する自己」があげられている。これらの自我意識に異常が生じるとき、例えば自我の能動性意識の障害により離人症や作為体験が生じたり、自我の単一性が障害されることにより二重自我の体験が生じたりする。また自我の同一性意識が時間的な障害を受けることにより交代人格が認められたりもする。

こうした自我意識の病理は、そこにその個人特有のパーソナリティが加わって多様な形・症状として出現してくる。ここではおよそ単一の症状として理解することが困難に思われるある特異な憑依妄想体験について報告することを第一の目的とし、あわせてその症状の基盤となっている精神力動についての解釈を試みたい。

## II 事例の概要

対象は筆者が臨床心理士として当時勤務していた大阪府下の〇病院（精神科）に入院してきた女性患者である。〇野〇子、大正11年7月21日生まれで、入院時57歳であった。昭和55年11月28日に入院し、昭和60年2月14日に死亡退院となっている。入院時の医師による診断はatypische Psychoseであった。自分には霊が憑いているという訴えがあり、面接中に突如として声が変わって「私はこの人に憑いている霊ですけどね、5年ほど前に出てきた。5年前まで

は物言えると知らなんだ。この人（自分自身でもある〇野〇子のこと）をいじめ殺したる思えますねん。」と険しい表情で語るなど、二重人格的な一面をもつ自我障害が顕著に観察された事例である。

この女性患者の簡単な生育史を以下に紹介する。大正11年奈良県で生まれる。同胞は兄と弟の3人。その後電気技師である父親の仕事の関係で大津、山梨と移り、甲府の県立師範付属小学校に3年生まで在学。愛媛県新居浜へ移る。本人9歳時、母親が腹膜炎により死亡。さらにモルヒネ中毒で再三入院していた父親は本人14歳時大阪府下の精神科で死亡。両親を失い、奈良県の祖母のもとへ行き16歳までの2年間奈良女子師範女学校へ通った。その後尼崎市の兄のもとで同居しつつ、住友で給仕係を17歳までした。8歳年長の会社員の兄との同居は苦痛のようであった。20歳で見合い結婚したが、「兄のところに居るのがいややったから結婚しなかった。腹違いの兄さんで私の儲けてきたお金全部取るような人で、賞与は全部取り上げてしまう。」と述べている。食事は近くのいとこの所でしていた。夫は自動車の運転手で尼崎で所帯を持つ。

結婚する前の18歳時（昭和16年）大阪市西淀川区の別の会社へ勤めている時期に、〇崎〇人という男性と知り合う。「広島出身の体格のいい男前の人。20から21歳くらいで職場で一緒になった。深い付き合いと違う。結婚してやる言うてごちそうしてもらっていた。海軍から上陸するたびごちそうしてもらて、ちやほやしてもらいたかった。」

本人が会社を辞め、相手が呉へ兵隊に行くまでの3か月程付き合い、その後手紙をやりとりした。相手が母親に服を買うつもりのお金で、本人は自分の服を買わせたい。夫は戦争へは行かなかった。昭和18年長男誕生。5年後次男誕生。昭和28年夫がストライキに絡み失業し、家を失う。32歳頃（昭和30年頃）夫の語るころでは、気分が変動しやすく、あまり家事をしないだらしない妻であったという。昭和45年豊中市へ移る。昭和49年頃（51歳頃）ある宗教教団の信仰に関わり始める。

後になっての本人の弁では、52歳くらいから霊が憑くようになった。53歳から4年程の間に4回I病院精神科に入退院を繰り返す。昔の恋人の霊が憑いていると言い、55歳時には電車に飛び込もうとする自殺企図があった。その後また症状悪化するが、I病院満床のため、57歳の時、筆者が勤務していたO病院に入院となる。62歳時入院中のトイレで転倒し意識消失状態となってまもなく死亡。

### Ⅲ 憑依妄想の形成と内容

以上が生育史の概略であるが、つぎに憑依妄想が形成されるまでの背景となる過程と、憑依妄想の内容をもう少し詳細に記述したい。53歳でI病院に入院しているが、それ以前の状況はよくわからず、ただその担当医の見解では発症はかなり古いものとみられている。○崎○人に関する妄想が現れてきたのは、ある宗教教団に入信してしばらく後の52歳頃のようなのである。「○崎○人から言われている」「○崎○人が子どもをはずかしめることをする」などの言動がみられた。風呂に水を入れていて「ここに首を突っ込まれて殺される」と言って警察に電話をかけることもあった。その後「ワンワン、ニャンニャンと○○教団が言わす」状態があり、そのため夜間近所から苦情が寄せられた。A病院入院中「自分に憑いている霊が死ぬと言っています」「私は悪い人間です」と繰り返し言っていた。この時期において被害妄想、罪障感、作

為体験は顕著であったが、霊が本人に代わって一種の人格をもって話したという記録はない。O病院入院の直前には、阪急電車に乗っていても昔の知人の霊が憑いていて飛び込もうとしたということである。

O病院入院の数日後、霊について医師に語った。「金属会社の工具で○崎○人という男がいて、戦中応召して戦死した男であるが、その頃よくお前と結婚してやると言っていた。5、6年前からその人が憑いてきて、私に取り憑き、私の口を借りてしゃべらせたり、私の身体に憑いて動作をさせられる。私に憑いて米屋で2,000円盗らせたり、神に供えてあった金を取らしたりする悪い人です。家でも風呂の空焚きをしろと言ったり、乱買いさしたりする」さらに続けて「私はこの人に憑いてる霊です。この人は悪い人です。この人は『私の霊』と言うけど私は亡者です」と霊がいわば人格をもって初めて対応する事態が観察された。

以後、霊に関して本人が語ったことをいくつか列挙すると「もっと悪くして本当の精神病院へ入れてしまうと霊が言ってくる」「私の言うことは霊が言わしているので霊を追い出してください」「霊がおしめをして猿ぐつわをするように言うてるからしてください」「私はこの人に憑いてる霊です。この人を病院から追い出してください。（追い出しましょうかと尋ねると）いえ、置いといてください、これは○野○子がいきました」「私の口、勝手に話される。霊が喋らせる。涙流したら霊がかんんにしてやるというのにこの人は涙が出ないのです。今喋っているのは霊です」「霊の力が強いので、眠れないでガラスを割ってしまいそうになる。」「霊がガスの元栓あけて家を爆発させる。子どもも大火傷させるか怪我をさせる」

入院後1、2か月すると自床で横臥がちとなり、○崎○人のことを自発的に訴えることが少なくなった。尋ねてみると「潜んでいますので、また出てくるかもわかりません」と答える。しかし時折霊は出てきて「私は霊ですけど、この人は私を恐れています」「私はこの人に憑いて

る霊ですけど、先生（医師）は私を悪者にとっているけど、悪いのはこの○野○子です。この人は他人の物さえ欲しがりますのや。私は○崎○人ですけど、この○野○子は嫌いでした、器量が悪いから」などと喋る。本人は「主人より○崎○人が好きでした。背も高いし頭の毛もあるからです」と言っていた。また「私はこの人に憑いてる霊ですが、まあこの人の肩の辺りにでも憑いていると考えといてください」と述べたこともある。肩から背中にかけて脂肪腫が認められ、本人はもう20年前からのものであると言っていたもので、手術により除去。

57年4月には筆者との対話のなかで霊について以下のような話をしている。「（霊の言葉）ずっと病院へ置いといた。本人の言葉）仇や言うてます。寝てる時は霊も寝てる。目を使うて物を見、口を使うて物を言い、耳を使うて聞く。霊の形はない。姿、形はありません。身体どこでも痛うできます。私の口で喋ります。（突如として表情、声が厳しくなり）先生、私はこの人に憑いてる霊ですけどね、この人は悪い人やから懲らしめてますねん。この人はね、人の物を盗ったり、スーパーで物盗ったことありますねん。それからこの人はね、私のお母さんの着物を買おうと思てたお金で、自分の服を買ってね、私のお母さんは普段着のままで広島から出て来て、私ら親子を恥ずかしいめに遭わしたんです。私は63（歳）です、数えの。男です。この人をいじめ殺したる思てますねん。（名前）○崎○人。この人の身体の中に居てる。おなか減りません。（この人について）まあ、ええとこというたら、あんまり喋らんとおとなしいとこです。（霊のお母さんは？）もう死にました。この人はね、私に何でも喋りますねん。ほんで私の言うこと何でもききますわ。（夢の中でも霊は居てる？）いいえ、夢の中へは出えしません。夢はこの人が勝手に見るから私は出ようと思てもでけません。（○崎○人はどんな人でしたか）私は背が高うて、身体が大きいて、男前でした。自分で言うのもおかしいけど、こんな汚い女と付き合うよ

うな男と違います。付き合ってから後悔してます。年よってどんな死に方していくか不安でなりません。（今喋ったのは？）今喋ったのは○野です。（霊は？）黙ってる。」「（私は）退院でけません。退院したら爆発させると霊が言うてます。病院居てたらガスがないから、家居てたらガスがあるから爆発させます」「（霊は）私の身体を自由に使います」「（○崎○人から贈られた）服は売ってしまいました、ちょっとの間着ただけで。お金が欲しかったから」

その後活気、交流のない状態が続くが、霊は背中に憑いているとの思いも続く。59年3月には「（霊は）もう悪さしないと言っている。もうかんにんしてくれてると思う」と言う。その年の9月にはそれまでとはやや傾向の異なる発言「今までは霊が憑いていて便を出してくれていたのが、この頃は出してくれないので浣腸してほしい」があった。だいたいこの頃から奇声を発するという異常行動が頻繁に生じるようになる。「霊が乗り移り、コラッなどと声を出させるので、落ち着いておれない」「霊が取り憑いて離れない」と大声で泣き叫ぶ。霊が話しかけてくる、邪魔して眠れない、霊が声を出させるとの訴えが1か月ほど続く。「一昨日、昨日と霊が私にキヤーンと言わせて、汗かかせて背中を拭かせたりすることを何十回とさせました」「戦争当時、私が貯めた100円のうち、65円の服をこの人が買って言うて買ったから、親には35円しかやれなくてその恨みで困らせていました」「43年前からこの人に憑いている霊ですけど、私には昨日のここのように思えてなんのです。私や私のお母さんに悪いという本当の気持ちをもってへんのです」その後も奇声は断続的に続いた。「霊が（他の患者の）○○さんのバカやアホと言わせるから、皆から髪の毛を引っ張られていやです」

60年（62歳）になった1月には相変わらず奇声は発するが力なくなってくる。また全裸になって洗面器を便器代わりにしゃがみこむとか、実際に洗面器に排便する、裸で廊下を歩くという奇異な行動が目立つようになる。「霊が憑い

て、ふとんの中で便させられます」「この人を風呂へ入れたら、風呂でババたれするので入れないでください」「〇崎〇人です。昭和19年7月20日南方の海上で空母に乗っていて戦死した。この人を男子病棟に入れてなぶりものにしてやってください」死亡の直前になると、熱湯を浴びるという内容が繰り返し語られた。「熱湯を被らせてください」「熱湯をかけてやってください」「熱湯を浴びせられるので（自分の身体を）抑制してほしい」そして死の前日に看護者に対し「明日、煮え湯を被ります」と言う。2月14日、抑制が解除されて後、再三トイレに行き、トイレにおいて気分不良となり転倒し意識消失する。回復処置の効なく40分後に死亡。

憑依妄想の形成、つまり霊の出現はおよそ52歳頃であると推測されるが、その原因としては18歳の頃の体験が基礎となっていると思われる。そしてこの体験というのは、他者から加えられた心身の苦痛にあるのではなく、自己の内面的な自責、反省、後悔といった種類の体験である。この患者の妄想は突然の着想によって生じたものではなく、過去の記憶と密接に関係していて、むしろそれが中核となって形成されたといえる。また妄想の内容は、本人の過去の行為を厳しく咎め罰する霊が憑いているというものであり、その咎め方や罰し方はさまざまなバリエーションをみせるが、高価な着物を買わせたことが原因であるという起点は最後まで変化しなかった。この妄想にみられる精神力動については、つぎの心理テストの解釈をも含めて、後に考察したい。

#### Ⅳ 心理テスト結果からのパーソナリティ考察

〇病院に入院中にいくつかの心理テストが施行されたが、その結果から本患者のパーソナリティを考察し、憑依妄想を解釈する際の補助としたい。

まず56年3月3日施行のロールシャッハ・テストであるが、プロットへの反応が本人と霊と

の両者によってなされ、本人の反応を霊が否定して変更するという異例のプロトコルが得られた。

[カードⅠ]

△ 3" これは…  
10" これはね、エビガニですわ。  
ちょうちょに見えます。  
まあ、そんなところらいいですわ。  
imp. もう見えませんね。 2'03"

1. (〇崎〇人が答えたと言う)  
これが目玉でこれが足。ほんでこれがエビガニの身体ですわ。

D F+ A 1.0

(エビガニからの連想を質問すると)

もう20年ほど前に子どもがよう取ってきました。

この〇野〇子いう人の子どものです。

2. (〇崎〇人として答えた)

ここ羽根を抜けてね飛ぶから

W F+ A P 1.0

[カードⅡ]

△ 3" これはね…  
10" まあ、これやったら…  
45" ランプに見えます。  
imp. もう見えませんわ。 2'25"

3. ここのところから、この白い格好のとこずつーと。

S F+ Obj. 1.0

(質疑段階の後に自発的に)

まあ私(〇崎〇人)はね、この人(〇野〇子)が言うようにさしとけ思うて黙ってましたけどね。私はランプと違うと思いましたが、この人がでしゃばって勝手に言うたんです。これはね、何か偉い人のね、使うもんや思ってます。偉い人の使うもの証拠にこんなとこやこんなとこ(D, D)が赤い。偉い人の数物なんか赤いから。

- D C F<sub>sym</sub> Obj. 0.5 W F<sub>+</sub> A P 1.0  
(しばらくして後)  
私はランプと見てますけど、○崎さんはな  
んと言うたか忘れました。
- [カードⅢ] 1'44"  
△ 5" これはね、二人の人がね、一つの仕事  
をしています。  
もうそれくらいです。  
imp. もう見えませんわ。  
1'40"
4. (○野○子が答えた)  
二人の人が向かい合って何か一緒に仕事を  
しています。何か廻してるように見えます。  
W M, F H, Obj. P 1.5
- [カードⅣ]  
△ 15" これは昔のね、人のね…  
毛皮ですわ。  
ほんでこれを着てたらぬくいです。  
ほしてね、この毛皮を着てる人はね、  
偉い人です。  
もう、そのくらいでしまいです。  
2'00"
5. 証拠に背中が盛り上がり、頭が小さくて、  
いかにも毛皮にくるまってる感じがし  
ます。(毛皮に思ったのは) 4つの足があ  
るから。  
毛皮に見えています。いや、やっぱり人の形  
もあらわれています。  
W F<sub>+</sub>, M Cloth, H 1.5
- [カードⅤ]  
△ 13" これはちょうちょです。  
もう、それくらいしか見えません。  
1'45"
6. 霊の私が言いました。羽根があって頭があ  
って足があることです。 1'50"
- [カードⅥ]  
△ 7" これは花です。  
11" これは楽器に見えます。  
1'44"
7. ここがこう出でて、おしべかめしべ。ここ  
がこう花びら。  
W FK P1 1.0
8. ここ三味線みたいに絞って。ここ線あって  
鳴らすとこです。  
W F<sub>+</sub>, m Obj 1.0  
これ花言うたんは私○崎○人。楽器言うた  
んも○崎○人。
- [カードⅦ]  
△ 13" これは壺に見えます。  
女の人が二人向き合ってるような感じ  
です。  
もう、それくらいですわ。  
1'04"
9. ここがこう形になって、こん中はこう水が  
入るようになってます。  
W, S F<sub>+</sub> Obj 1.0
10. これが鼻と口。目がへっこんでて頭の髪を  
とき上げたようで。これが身体でそういう  
ふうに図案化したもんです。  
この○野○子が言いました。  
W M H 2.0  
私 (○崎○人) は壺にしか見えません。他  
のものには見えません。
- [カードⅧ]  
△ 8" これも花に見えます。花を逆さまにし  
た状態です。  
まあ、それくらいですわ。  
1'50"

11. 私（霊）はこれは花ではのうてね、何かね入れ物のような気がします。ここがこう丸うなあって、上から物が入るようになって。これはね、花ではのうて壺みたいなもんですわ。

W CF P 0.5

W F+ Obj 1.0

〔カードIX〕

- △ 7" これもやっぱし花ですわ。

これはねえ、同じような花やけどね、こっちの方が一回り大きな花です。さっきののも花やったけどね、こっちの方が大きい花です。

ほんでやっぱし逆さま向いてますわ。

2'16"

12. これはね、植物にはちがいないけど、花ではのうて木。赤いとこ根、青いとこ葉っぱ、朱色のとこ葉っぱ。木や言うてはりますねん、○人さん（霊）が。

W CF Pl 0.5

〔カードX〕

- △ 2" これはね…

35" 昔の人がね、陣羽織みたいなものを着てます。

これはね、普通の人と違ってよっぽど偉い人が着てる着物であってね、それを誇張してかいてるんです。もう見えませんわ。

3'20"

13. 陣羽織、袖、ここ紐結んである。

これ頭で顔で。

色が鮮やかやから偉い人の着物。

dr, S FC Cloth, Hd 1.0

ストより解釈されるパーソナリティの特徴として、まず自我の単一性障害のサインが見出され、自我境界の曖昧さ、脆弱さが認められる。情緒刺激を受けた場合には感情的に反応しやすく、そのため冷静な判断は阻害されるようになる。ただし強い衝動性や攻撃性はなく、むしろ受動的な傾向もみられるので他者への攻撃的言動として表面化するよりは、自己内部での精神的混乱を引き起こしやすくなると考えられる。また思考、観念領域は狭小で固定的であり、知的精神活動は自己の限定的な部分の内部でのみ行われる。認知面における顕著な歪曲はみられず、自我機能の不全さを内包しつつも、一応の常識的、日常的行動は消極安定的に保ち得るものとみられる。

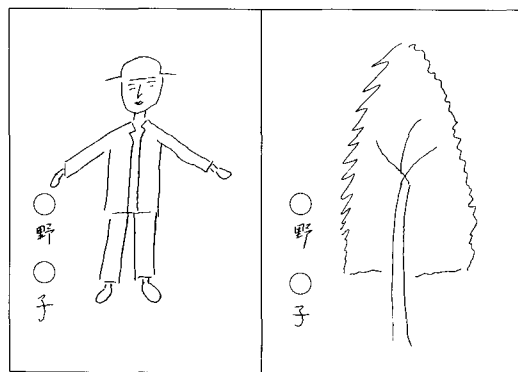


Fig.1 本人に憑いている霊（左図）と樹木画（55年12月）

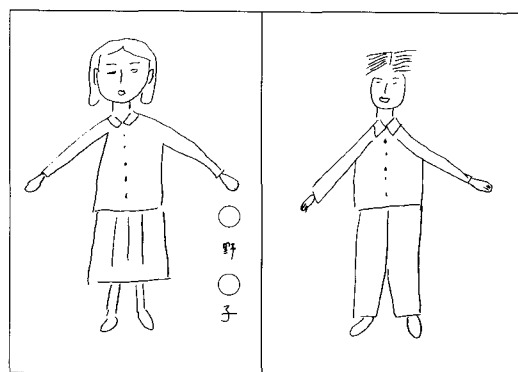


Fig. 2 人物画：女性像と男性像（ともに56年3月）

本人と憑いている霊との反応が交錯するという異常さはさておき、このロールシャッハ・テ

また人物画 (DAP) からは以下の3つの特徴を指摘することができる。1. 思考・行動はかなりrigidであり、また抑制的である。2. 外部世界への関心が希薄で社会・対人的交流志向が弱々しくなっている。3. 身体境界についての感覚に緊密なまとまり感を欠いていて、自他の区別が曖昧である。

樹木画 (BAUM Test) からの特徴としては、1. 自我弱小、自我活動の停滞性、2. 自己内部と外部との分離感覚の不十分、3. 環境との接触や操作の弱さ、曖昧さ、の3点があげられる。しかしながら人物像、樹木ともに非現実的なものではない。

文章完成検査 (SCT) では、80の刺激文のうち56に対して記述がみられ、長男 (40歳) や次男がまだ結婚していないことに対する母親としての気遣いや不安が繰り返し述べられている。その他では割合に常識的、模範的な記述が多くみられる。例えば「(もし何かをまかせられたら) できるかぎりします」「(結婚生活というものは) おたがいに気ままを言ってはだめ」「(私は) 近所の人と仲良くしなかったために (失敗した)」「(私が一番欲しいのは) 息子と私はじめ家族のけんこうです」などと書いている。

しかしながら霊に関する記述も多数を占めていて、全体としては観念内容に多彩さのないSCTとなっている。霊についての文章を以下に示す。「(私が恐れていることは) レイがついて家にかえると家を爆発さすと言う事です」「(私を悩ますものは) レイです」「(もし) レイがはなれて息子がけっこうしてくれたら (ならば非常に幸福なのに)」「(心配でなくなればよいと思うのは) レイです」「(私のからだは) レイにしはいされています」「(人知れず私が恐ろしいと思うことは) レイが身体についていると言う事です」「(いつかそのうち私は) レイがはなれてくれる事をのぞみます」「(私を不安にするのは) レイのそんざいです」これら霊を恐怖、困惑の源泉として書かれているが、霊が主体性をもって書くという形式の文はまったくなかつ

た。

絵画統覚検査 (TAT) には異常な反応傾向はみられず、常識の範囲内でストーリーを展開し、社会性や対人関係の認識は一応ノーマルに保たれている。親子、夫婦の愛情交流を中心として、回復・更生というテーマが多くハッピー・エンドの物語構成である。例えばつぎのようである。

カード2:45"

親が働いて娘さんが学校へ行っている。娘さんが親のとこへ来て、学校へ行ってもええかというふうに尋ねてる。これからもやっぱり、この娘さん学校へ行きます。娘さんは親に気兼ねしてます。親は心配せずに学校へ行けと言うてます。 4'52"

カード3 GF:38"

家族のもんがこの人をドアの外へ追い出した。この人が気儘もんで親の言うこと聞かんです。部屋の中へ入れて欲しいと泣いてます。許してもろて家の中へ入らしてもらいます。 2'35"

カード10:21"

長い間別れてた夫が帰ってきた。ほんで懐かしがってます。戦争かどっか行ってた。会えてうれしい。仲良く暮らします。 3'03"

カード13MF:32"

女の人が病気で男の人が泣いてる。早く良い医者に診せたい。男が遊んでて女を働かしたので、こんなふうになった。良い医者にかけて病気が治ります。また幸せになります。 4'02"

カード18GF:21"

苦勞して変わり果てた娘の顔を見てお母さんが泣いてます。家出をしました、娘さんが。男のどこ行ってました。捨てられて帰ってきました。娘はすまんと思えます。お母さんは優しいに娘を迎えてます。娘は親の暖かい愛

に、よって元どおりの元気な姿になります。  
3 33”

57年3月に実施したWAIS知能検査の結果では、言語性IQ=109、動作性IQ=82、全検査IQ=99であった。各検査の評価点をあげておく。

言語性検査	評価点	動作性検査	評価点
1 一般の知識	9	7 符号問題	4
2 一般的理解	12	8 絵画完成	6
3 算数問題	10	9 積木問題	6
4 類似問題	11	10 絵画配列	5
5 数唱問題	8	11 組み合わせ問題	6
6 単語問題	12		

また57年7月に行った鈴木ビネー式知能検査によると、得点57、知能年齢13歳8ヵ月、知能指数85という結果が得られている。

## V 憑依妄想にみられる精神力動

この女性患者の憑依妄想の成立と精神力動を考察するにあたって、まず遺伝的負因からみていきたい。本人が小学校中～高学年の頃、父親はモルヒネ中毒で入退院を繰り返していたとのことで、その後3、4年間は仕事をしないで本人14歳時に精神科にて死亡している。薬物依存の成立には依存性薬物の存在や環境要因も大きく関わっていて、すべてを個人の病的心理機制に帰すことはできないが、なんらかの遺伝的負因があった可能性は考慮しておいてよいと思われる。

本人が〇病院に入院してきた時、長男は40歳になっていたが茨木市の精神科への入院歴があり、家でぶらぶらして過ごす状態が続いていた。また5歳年下の次男については精神科入院歴は確認されていないが、精神科治療の経験者および受診中の者を積極的に雇用する会社に勤務していた。こうした状況から考えて、本人に内因性精神疾患の遺伝的負因があったと考えることは妥当であろう。

つぎに病前性格、あるいはどのような環境の

もとで性格が形成されていったかを考えてみる。本人が9歳の時に母親が死亡し、その後モルヒネ中毒で生活力の乏しい父親と暮らすのが、父親も本人14歳時に死亡している。思春期まではけっして恵まれた家庭環境ではなかったと想像されるが、高い学歴を有している。本来の知的水準もかなり高かったのであろう。数年間の断続的な入院生活を経て知的効率がいくぶん低下した時点でのIQが99、特に言語性IQは109であった。満足でない境遇の中で勉学に努力する規律的、抑制的な人格が形成されていったと思われる。これは atypische Psychose の病前性格に多くみられるとされる几帳面、頑固などと通じるものである。

祖母の世話になったり、異母兄と同居したりして、立場上無理の言えない抑圧的な生活を強いられる状況に置かれた。周囲に向けて不満、攻撃を直接的に発散しがたい状況でもあり、相手を責めるよりも自分を責めて攻撃を内面に向けてという傾向が発達していったと考えられる。

以上のことから思春期から青年期にかけての基本的な性格特徴を仮定すると次のようである。比較的高い知的能力を持ち、秩序、規則、道徳の枠をよく守って、独創的ではないが従順に決められたとおりに処理することはできる。周囲に気兼ねして自己の自由な感情の表現や他者への要求を抑え込んでしまいやすい。エゴグラムにおけるAC (Adapted Child) にも似て、控えめで従順な側面と、その反動として蓄積される不快、不満が原因となって生じる反抗的、攻撃的な側面とが表裏一体のものとして含まれていたと推察できる。

さてこのような〇野〇子は18歳になって、〇崎〇人と出会い、強烈な恋愛感情を体験する。両親のいない状況であり、また嫌悪すべき異母兄との比較もあって、彼との出会いはより一層理想的なものとして受け止められたであろう。しかしこの恋愛感情は本人にとっておそらく初恋に近いもので幼さの残る精神発達水準にとどまる恋愛ではなかったかと思われる。このとき



の交際について本人は「深い付き合いと違う」とし、ごちそうをしてもらったり、ちやほやしてもらったりすることにも関心があったとしている。本人は、彼は海軍で上陸するたびに私がセックスさせてくれると思っていたようだと言っているが、本人の規律的、道徳的に厳格な性格と、未成熟な恋愛意識を合わせて考えると、本人が拒絶ないしは逃避的な態度であったため性的交渉はなかったと推測される。一方的に与えられるばかりの心地よさを味わったが、この時相手からの愛情と性的要求を受け入れられなかったことが、やがて後悔へ、罪障感へとつながっていく。それからの付き合いは彼が海軍に所属していたため、手紙のやりとりぐらいになってしまう。

一方、自分の給料を奪うような異母兄との同居生活から逃れたい一心で、本人はそれほど好きでもなかったのに現在の主人と結婚してしまう。子どもに恵まれ平穏な日常を送っていても、妥協的、打算的に結婚した自分を責める気持ちは潜在的にせよ持続していった。

通常の健全な自我機能・強度が保たれている間は、彼への謝罪、自責の気持ちや思慕の念はなんとか抑えられていたが、Atypische Psychoseの発症に伴ってこのバランスは崩壊する。心的エネルギーが減弱し、心的緊張の低下を招き、自我意識が病的に希薄になってくるにつれて、葛藤の源泉として抱き続けてきた罪障感、後悔、自責、それらから派生する自虐観念などが相対的に強大化して自我を脅かすようになる。ノーマルな範囲の自我防衛機制的限界を越えて、自己が自己を責め苦しめるという状態に至るが、これを軽減する方略として、苦しむ自己と苦しめられる自己との分離が図られたものと考えられる。すなわち本来の自己は、霊という別の存在によって苦しめられるという構図を作りあげ、同情されてもよいような被害者的立場に変換してしまうわけである。このあたりは解離型ヒステリー（Dissociative Type）と近似した力動性と考えることもできる。

また、霊の出現については〇〇教団に入信し

たことがきっかけで、本人は霊という概念に親近性をもったのではないかと、そして過去からの〇崎〇人の記憶と霊概念とが融合し、その人の霊として外在化させるようになったのであろう。あるいは異なる角度から考えるならば、それまで漠然と抱き続けてきた罪障感を入信して自分なりに整理した結果、霊に罰せられる自己という関係にまとめて一応の納得が得られたのかもしれない。

〇崎〇人の霊は一種の人格を持つかのように筆者や医師、看護者と対話したが、その内容は〇野〇子と関連したエピソードに限られていた。霊を独立し完結した人格とみなすにはきわめて不完全で断片的であり、本人の感情と記憶の一部が分離して変性したものとみなしたほうが適切である。さらに霊の出現は、知りうる限りでは第三者と対面している場面のみであり、ヒステリーの要素も含まれていて自律的な別個の人格とはみなせない。またごく一部の場合を除いて、本人と霊は相互に相手の存在や状態を知っており、相手の人格のときの記憶が消失したことはなく、相互に交流をもっていたか、むしろ一部分重複しているとの印象がもたれた。作為体験は活発であったが、霊が自発的に行動を起こすことはなかった。

これらの点を総合すると、DSM-IVにおける解離性同一性障害（Dissociative Identity Disorder）、いわゆる二重人格とは異なっている。解離とは「耐えられない記憶やそれに伴う一連の事件の内容を現在の記憶を持つ意識の状態と切り離し、それを思い出したり苦しんだりしなくてすむための大切なメカニズム」（和田、1998）と説明されているが、本事例では切り離しは認められず、併存した状態で苦しみ続けていたのである。

しかしながらこの女性患者の苦しみに肯定的な意味を求めるならば、つぎのような事柄をあげることができる。まず第一に、霊によって自己が罰せられることは本人にとって〇崎〇人への謝罪と贖罪になっていて、罪障感の軽減としての意味を持つであろう。戦死した昔の恋人を

霊として心の中に再生させ、罰せられることにより許しを乞うことが可能となる。第二には、彼への愛情の確認と想起という機能も想定できよう。妥協的で不本意な結婚をしたが、けっして嫌いになったり忘れてしたりしたのではなく、常に意識の中心を占める存在として維持することができるのである。高価な着物を買わせたことへの謝罪だけでなく、彼からの愛情、要求を受け入れておけばよかった、今も愛情を失っていないという気持ちの再確認でもある。さらに罰せられるという負のストロークであっても、今は亡き彼との関わりを保つことができるのは彼女にとって望ましいことなのである。この苦しみの中にあつてさえ、幸福だった当時の記憶が想起されていたのかもしれない。

精神分裂病にみられる一次妄想と異なり、その発生が多少とも了解可能な二次妄想である。AC (Adapted Child) 的な要素の強い性格を基礎として、過去の記憶と感情を材料とし、宗教的体験から霊の概念を得て、自我意識の病理的弱まりの過程において、やや抑鬱的な気分をベースに、ヒステリー性の誇張と演劇的要素が加味されてこの憑依妄想が成立してきたのであろう。なお死亡の数日前からは自我の統制力が著

しく低下して、猛烈な退行を生じて、自己と霊を対峙させることさえ困難な状態になっていたようである。

### 参考文献

- アメリカ精神医学会、高橋三郎他訳『DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引き』医学書院、1995年。  
笠松 章『臨床精神医学I』中外医学社、1971年。  
加藤正明『新版 精神医学辞典』弘文堂、1993年。  
加藤伸勝『小精神医学書』金芳堂、1976年。  
加藤義明編『心理学基礎用語集』八千代出版、1990年。  
河野友信『心身医学のための心理テスト』朝倉書店、1990年。  
前田重治『図説 臨床精神分析学』、誠信書房、1993年。  
三浦岱栄『現代精神医学』文光堂、1974年。  
西丸四方編『臨床精神医学辞典』南山堂、1990年。  
荻野恒一『精神病理学入門』、誠信書房、1974年。  
阪本良男編『心の病Q & A』ミネルヴァ書房、1995年。  
志水 彰編『新精神医学入門』金芳堂、1995年。  
末松弘行『エゴグラム・パターン』金子書房、1989年。  
高橋雅春『ロールシャッハ解釈法』牧書店、1970年。  
妻倉昌太郎『無意識の心理学』福村出版、1979年。  
和田秀樹『多重人格』講談社、1998年。

(1998年4月13日受理)